

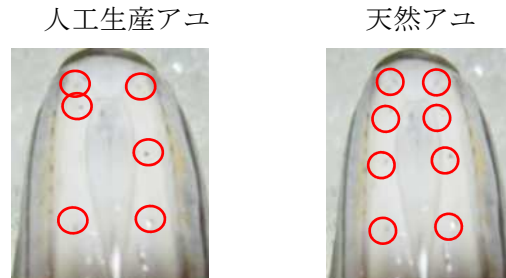
## 人工産と天然アユとの区別方法

アユは内水面漁業における重要魚種で、漁獲量を維持、増大させるため、全国的に種苗放流がなされている。かつては放流用種苗の大半を琵琶湖産種苗が占めていたが、現在では人工生産種苗の占める割合が多くなっている。

アユ種苗生産技術は向上したが、依然として人工種苗には下顎側腺孔、鱗及び耳石に形態異常が見られ（写真1）、人工産と天然遡上魚とを区別する指標の一つとなっている。

平成 26 年 4 月 30 日、吉井川の河口付近を遡上中のアユの耳石を観察したところ、70 尾中 33 尾に結晶化が見られた。生産機関によっては、種苗の 90% 以上に耳石の結晶化が見られるとされており、今後、耳石の結晶化率を指標とした放流効果調査に役立てたい（資源増殖室 近藤）

下顎側腺孔<sup>※1</sup>の並び方



鱗の大きさ<sup>※2</sup>



耳石<sup>※3</sup>の形状



写真1 人工生産アユと天然アユの区別に用いる形態的違い

※1：アユの下顎の腹側に開いた小さな孔で、天然アユは左右4対ある。

※2：人工生産アユの鱗は大きく、天然アユは小さい。

※3：魚の頭骨中にある骨の一種で、人工生産アユは結晶化率が高い。

